

## 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

**<書評と紹介>根崎光男著『将軍の鷹狩り : 鷹狩りをめぐる政治と儀礼』**

著者	安田 寛子
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	53
ページ	54-56
発行年	2000-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/10697">http://hdl.handle.net/10114/10697</a>

根崎光男著

## 『将軍の鷹狩り』

—鷹狩りをめぐる政治と儀礼—

安田 寛子

本書は著者が長年取り組んできた近世鷹場研究から、これまでの成果をまとめたものである。著者は昭和六〇年（一九八五）、共著で『鷹場史料の読み方・調べ方』を著しているが、この書はこれまで多くの研究者が参考文献としてきたものである。しかしその後、著者は新たに気づいた点や十分に指摘できなかった点を強く意識するようになったようだ。その結果、本書が執筆されることになったわけである。著者が自ら述べているように、本書は「近世社会において鷹狩や鷹場を通じて築かれた政治編成や社会関係の考察を軸に、その歴史的特質の究明」をめざしたものである。またその際、鷹狩の歴史的性質を意識しながら、加えて鷹狩をめぐる諸関係を当時の政治動向のなかに位置づけるように努めている。そこには幕府と民衆、さらには自然と人間との関係までも視野に入れていきたいという著者の意気込みも示されており、それには賛意とともに敬意を表するものである。

まず本書の構成を記し、次にその概要を紹介したい。

はじめに

## 第一章 鷹狩の伝統と性格

## 一 権力と鷹

## 二 徳川将軍権力と鷹

## 第二章 将軍の鷹狩と幕府の放鷹制度

## 一 家康の鷹狩

## 二 秀忠・家光・家綱の鷹狩

## 三 綱吉の鷹政策

## 四 吉宗の鷹狩

## 第三章 公儀鷹場の編成と支配

## 一 家康・秀忠期の幕府鷹場

## 二 家光・家綱・綱吉期の幕府鷹場

## 三 幕府鷹場の再編成

## 四 恩賜鷹場と幕藩関係

## 第四章 鷹場と民衆

## 一 鷹場規制と民衆

## 二 鷹野役の上納と民衆

## 参考文献

第一章では、古代から近世までの時の権力と鷹および鷹狩との関係、その伝統・性格についても検討を行っている。第一項では古代から豊臣政権までを扱い、第二項では徳川政権を扱っているが、第二項で著者は、近世社会において誰が鷹狩を行っていたのかということが、徳川政権下の権力関係やそれまでの政権との違いをみきわめるためにも重要であり、また鷹儀礼が大きな役割を果

たしたと指摘している。

第二章では、第一項・第二項で家康・秀忠・家光・家綱各将軍の鷹狩について検証している。第三項の綱吉の鷹政策では、まず綱吉の館林藩主時代の鷹狩と将軍家綱との鷹をめぐる相互儀礼について触れ、その後将軍に就任してからの鷹政策について明らかにしている。綱吉は幕府政策の基調に「仁政」を掲げ、それに基づき放鷹制度を縮小、やがて鷹遣いを全面的に停止し、朝廷への鷹の鶴の進上も取り止めた。しかしそのような状況にあってもなお、朝廷への新鴻・新鶴の進上は継続されており、これは諸鳥の進上儀礼が朝廷への儀礼として不可欠なものであったことを示しているという。また著者は、綱吉逝去による生類憐みの令の解除が鷹狩復活の機運を醸成したとし、藩政において放鷹制度の位置づけが高かったことを指摘する。最後に第四項として、吉宗による幕府鷹場制度の復活とその再編・強化について述べ、この同時に旧制の見直しと簡素化が行われたことを明らかにしている。

第三章では、公儀鷹場の編成と支配についての説明を行っている。著者はまず、従来の研究では寛永五年（一六二八）一〇月二八日の鷹場令の発令をもって幕府鷹場が成立するという理解が通説であり、家康から家光にいたる将軍は全国各地でも狩猟できるものと考えられていることに対して疑問を呈している。筆者はすでに、徳川氏の鷹場が関東領国時代から設定され、開幕後それが継承・拡大していったことを指摘しているが、いまだ大方の理解を得られていないようだととして、ここで改めて幕府鷹場の成立・展開過程を相対的に追求したいとしている。

そこで第一項・第二項では、家康の関東領国時代から秀忠・家光・家綱・綱吉各政権下における幕府鷹場について検討している。そこでは徳川氏の鷹場が量的拡大・質的变化を伴いながら、公儀鷹場としての歩みを遂げていくこと、その後綱吉政権下、生類憐み政策との関連で鷹遣いが停止され、「御鷹場」にかわって、鳥殺生規制を徹底させた場所としての「御留場」が成立したこと、そしてその「御留場」は鳥見役の廃止をもって「元御留場」と称されることになったことなどを明らかにしている。

第三項は、享保元年（一七一六）以降の幕府鷹場の再編成を扱っている。まず最初に復活されたのは「御留場」であり、その後鳥見役の任命があつてはじめて「御鷹場」の用語が使われるようになったこと。そして御拳場・捉飼場（取飼場）の編成と支配および鷹部屋周辺の鷹遣い場についての説明を行っている。第四項では、恩賜鷹場と幕藩関係について検討しているが、そこではまず恩賜鷹場の歴史的品格を明らかにしたうえで、御三家・御三卿・諸大名それぞれの恩賜鷹場について、その性格・支配・家格・幕府との関係などの説明を行っている。なお筆者は、上位者が下位者へ与えた鷹場一般を「恩賜鷹場」としてとらえ、近世中期以降、それが「拝領鷹場」や「御借場」（「拝借鷹場」）などに分化していくという見解を示している。

第四章は、鷹場と民衆との関わりについて扱っている。第一項では、多岐にわたる鷹場規制が民衆の生活に多大な影響を及ぼしたことを指摘する。特に、農耕・漁猟に影響を及ぼす規制は深刻であった。しかし鷹場領主と漁猟人との間で、魚の上納と不審者

の監視を義務づけるかわりに魚獵を許可するといったような互酬的關係が成立することがあるという。第二項では、鷹場村々に課せられた多種多様な鷹野役の賦課状況と負担のあり方について述べている。それは基本的には鷹場組合の霞役として徴収されたが、領々連合によって分担されることもあった。また分担をめぐっては時に確執が生じ、幕府側の調停を必要とすることもあった。本章ではこのように、鷹場と民衆の間には不可避的に鷹場規制・鷹場役が存在したことを明らかにされている。

最後の参考文献では、前出の『鷹場史料の読み方・調べ方』に紹介されていない、一九八〇年以降に発表された鷹狩・鷹場関係の著書・論文が記載されている。これに加え、文中に示された史料集や自治体史は、これから鷹場研究を始める人や、鷹狩・鷹場に興味がある人には大いに参考になるものである。

以上、簡単ではあるが本書の構成とその概要を紹介した。

本書は新しい研究成果を踏まえながら、著者自身が長年蓄積してきた多くの研究成果を集約したものである。ここに本書が出版されたことは、鷹狩・鷹場関係研究者にとって、改めて自身の研究を見つめ直し、さらに研究を深めていくよい機会を与えられたといえるのではないだろうか。また鷹狩は、古くから洋の東西を問わず行われてきて、現在でも富裕者の趣味・嗜みとして続けられているところもある。それほど人と鷹との関係は深く、本書は鷹場研究の専門家でなくても、知的好奇心を満足させてくれる好著である。多くの方に一読されることをお勧めしたい。

また著者は「はじめに」の中で、「鷹狩の技術面や鷹役人個々

の実態、そして奥鷹山の運営など、割愛せざるを得なかった部分が少なからずあり、これらの点については後日に期したい」と述べている。本稿を執筆している私自身鷹場を研究しており、これらは大変興味を感じる研究対象である。次の機会が待たれる。

（一九九九年八月刊 四六判 二二二頁 二五〇〇円 同成社）